



Title	第八章 國民歴史の現時点の分析 躍進か破滅か 33
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1964-01-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77450
Type	manuscript
File Information	I040_0133.pdf



33

K-10

35

NOTE BOOK

*Made of paper
specially prepared in Japan*

第八章

口氏丁史の現時点の
分析

躍進か、破滅か

日本の成長方式

世界国家への期待

昭和三十一年八月八日

TRADE **K.S.K.** MARK

33

口民下衆の現世より近所

一世界一組の民社をいふこと

一七百年

一徳小の太東國同の歴史

一日本の成ふこと

一世界の歴史

一世界の家への歴史

人種である。更に大衆を驚かす。
白人は、一流の白人は、十流の
白人である。有色人種は、白人
の近くにおよぶ。

産業の躍進は、資本の民生に
おける消費革命、レナールの知
識化、所得倍増計画、交通網の
発展、生活水準の上昇、都市の
拡大、寿命の延長。

したがって、力強い世界は、
産業革命、都市化、交通網の
発展、生活水準の上昇、都市の
拡大、寿命の延長。

科学の発展は、教育の普及による。
科学の普及は、教育の普及による。
科学の普及は、教育の普及による。
科学の普及は、教育の普及による。

廿百午回

今世紀の時から今世紀の百五十年
は本國の生活環境（この世紀）
に口承（この世紀）の出来のなる千大なる
余りの丁度（この世紀）の成で最も堅固のほ
か、一世紀の終には、
この世紀は日本文化の上に
金く、おもしろい、
移種する、
この政治の形態の概多が、
大か、
口承の両現（この世紀）の概多が、
るは金く意外の予である。

十五世紀の回は七八九十年の頃

約六世紀の初原住の王の頃だ

か、十三世紀の頃、チベット族が

か、チベット族がチベット族が

武の世に、チベット族がチベット族が

王政の頃、チベット族がチベット族が

水は、チベット族がチベット族が

あ、チベット族がチベット族が

か、チベット族がチベット族が

い、チベット族がチベット族が

い、チベット族がチベット族が

い、チベット族がチベット族が

東はよい紙があれど、西は紙がなくて、この紙は
 今も旗印の極端の差が3倍。
 漢字的にも、や弊害の本質
 百々あるが、我々が本邦の文化
 を守る原則に用ひて断行しな
 いといふ事は、近世の構成の中
 に千年と昔の原状の家を傳授す
 るより^大進んで来た。た
 だ、近代の出で、この古代の家
 の兩強強化のため、新の家は精カ
 の半分を消費する所にはならぬ
 了。お給物の天皇制が飛べん

あゝ行々
幕府政令がさるのまゝ
いふまでもなく、
西は日本人はもとすはるゝ近代
口実の成るをいふは、
然し軍に主なるは、
にはこの要、
通行は有難く、
明治時代、
たといふは、
と天身、
我か、
を特

終戦後の日本

絶対制の創作禁備に

時代の人は日本人には其の胸をたたく
るべきは其の天皇様

威なきを難

るに精一杯下あつたかへる

佐子はその上で強と

対立の大衆団化

傍聴の対立、左派の対立も思想的
対立も他大団の対立の時代もた
長大なる連帯の対立もた
いる。何れの一かか勝つにしても同じの
半戦は敗戦の半戦である。

対立の形が、見解の相違、立場
の質的相違に示つてが、それらの
下あまに過ぎない。対立は、対立は
強い同率に示す。対立は、対立は
から、対立の形がある。対立は、対立は
の相異が、全く異なる。対立は、対立は

◎日本は今民主制を口の外に
標榜しつゝし政治組織も民
主制に依るものであるが、天皇制を
政治の内に取り入れざるを希望する人
は、天皇一家とその周辺に余り
自己的な理由で布しているのは明ら
かである。今のところ又工の
格な天皇制は何とかさすゝをつけ
る必要が年と共に加へつゝある。
日本国民はこれを何と知覚するか、
大きな問題である。

によるものである。時にはそればかりでは
ない。

◎大財閥と大政黨の協力によれば
一々世襲の
貴族階級は新聞の普及の爲に一
地域、又は土地占據が不可解に
なり、大工場、設置の爲に藩閥
藩閥が、水方、設置の爲に小村が
又、貴族、貴族の爲にその地域、
成立するのを要求する。つまりは
或るかよく思ふところがある。口裏又
は自治体が特権階級の爲のものを
必要とする場合も同じである。

1937

はない。大都市の繁華のためにある（
路は甚だしく繁華である。そのために
通商設置のためにある。そのために
場合も異なるとは、他人に對して
は及ぶ程々の程度か必要である。
学術的企業体が新陳代謝の
めにかくの如き要求も他人に求め
る事は許さず、すきでない。である。

然矢野國々大政連の令力はかくの如
き事をするもなく、処置してゐる。

もし大勢力であり大勢力の根深の
梯分は世の形で受けこめ、つか

又、実それ、実現される。拾^収集^集の
つかぬ混雑がおこる。それは明かである。
そんな機会は今日で次ぎに秋
にかけては下である。丁度米の
消費の如く、そのすゝめ下せられ
た。中^中野^野金^金でいそうである。理^理
評^評の毎^毎年の定時開きです。
はうくす。場合が多い。爆発し
る。大きな火だか、いつもすゝめで収ま
る。たかろの火いなる。と今に
一瞬大爆発がおこる。可能限を
はあ。

日本人は非難強いのよく堪えさる
その日本人の性格をよく知っている私
は現時における大東國紛争の
危期は、~~中~~ 危期は、何とか名時續
進して行くものと考へてゐる。過ちを
の日本国民もこんな危期に
やはりそんな態度で迎へぬとい
ふ事だものと思ふ。それが日本の民
の成長方式である。